



出会い

No. **77** 2018. 3. 16

キリスト教教育委員会



『酪農讃歌碑』

『さまざまな道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ。どれが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ。』(エレミヤ書6:16)

卒業生の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。また皆さんと『酪農讃歌』を歌える日を楽しみにしています。 獣医保健看護学類 動物生体反応研究室 宮庄 拓

《べき (the shoulds)》の暴君からの解放 (ローマの信徒への手紙7章15節、20節)

——「原罪」と「べきの暴君」——

循環農学類 キリスト教応用倫理学研究室 小林 昭博

賀川豊彦と酪農讃歌 獣医学類 獣医衛生学ユニット 永幡 肇

「未見へのまぼろしと真理の探求」

環境共生学類 生命環境物理学研究室 矢吹 哲夫

多くの出会いとヒンメリ 食と健康学類 栄養指導論研究室 杉村留美子

《べき(the shoulds)》の暴君からの解放 (ローマの信徒への手紙7章15節、20節) ——「原罪」と「べきの暴君」——



循環農学類 キリスト教応用倫理学研究室 小林 昭博

なぜなら、わたしは自分のしていることが分からないからである。というのは、わたしは自分がしたいと欲することをせずに、自分が嫌悪することをしているからである。

(ローマの信徒への手紙7章15節 [私訳])

もし、わたしが自分の欲していないことをしているというのであれば、それをしているのは最早わたし自身ではなく、わたしの中に巣喰っている罪がしているのである。

(ローマの信徒への手紙7章20節 [私訳])

原罪——内在する罪

冒頭の聖書テキストは、パウロが著したローマ書7章7-25節の文脈から抜き出して翻訳したのですが、このテキストの全体は人間に内在する「罪」の問題を論じています。ここで言う罪とは、アダムとエヴァの楽園追放の神話に描かれている人間の「原罪」のことを指していますので、冒頭で引用したローマ書7章15節と20節は「原罪」に苦悩するパウロの偽らざる気持ちの表れだと言えます。

わたしたち現代人からすると、「原罪」という考えは荒唐無稽なものにしか映らないかもしれませんが、ここでパウロは自分の内面の「罪」の問題に苦悩し、「わたしは自分がしたいと欲することをせずに、自分が嫌悪することをしている」との思いを吐露しています。つまり、自分の内面の「罪」(原罪)が自分の意識や意思に反して、不意に自分を突き動かし、あろうことか、「わたしは自分のしていることが分からない」と言うほどに混乱してしまっているということなのです。

「べきの暴君」

20世紀中葉に新フロイト学派の精神分析学者カレン・ホーナイ(1885年-

1952年)が「べきの暴君」(tyranny of the shoulds)という用語を生み出しました。原語を直訳すると、「べきの専制/べきの独裁」となりますが、日本では「べきの暴君」という訳語で定着しています。英語には助動詞のshouldが名詞化した単語は本来ないのかもしれませんが、ドイツ人である彼女はドイツ語のSollenから着想を得たものと思われます。

Sollenはカント哲学以来「当為」と呼ばれてきたものですが、「当然為すべきこと」、つまり人間が果たすべき「義務」を表す術語です。しかし、ホーナイが言う「べき」(the shoulds)とは、カント哲学の「当為」という自発的に行われるポジティブな働きではなく、内的に強制されて行われるネガティブな働きを表すものなのです。

ホーナイによれば、「べき」に囚われ、支配されている人は、その行動規範が「べきである」(should)や「べきでない」(should not)といったように、常に内的な「何か/誰か」によって強制されてしまっているというのです。そして、「べきの暴君」とは、その義務化が強迫観念としてその人の内面に居座り、「暴君」のように「専制的・独裁的」にその人を支配してしまっている状態を表します。



【C1号館正面に描かれている聖句 ローマの信徒への手紙5章3b～4節】

ここにあるのは、あるべき「理想の自分」(ideal self)と現実の「嫌悪すべき自分」(despised self)とが乖離していることを受け入れられず、その「引き裂かれた自己」の狭間で苦悩する人間の姿です。

「原罪」と「べきの暴君」

繰り返しになりますが、ローマ書7章20節において、パウロは「もし、わたしが自分の欲していないことをしているというのであれば、それをしてるのは最早わたし自身ではなく、わたしの中に巣喰っている罪がしているのである」と吐露しています。これは「原罪」によって自己が引き裂かれている状態を言い表していますが、その引き裂かれたパウロの姿が、ローマ書7章15節の「なぜなら、わたしは自分のしていることが分からないからである。というのは、わたしは自分がしたいと欲することをせず、自分が嫌悪することをしているからである」という言葉に滲み出ています。

そして、自分の内面に巣喰っている「原罪」に苦悩するパウロの姿は、ホーナイが言う「べきの暴君」に支配され、あるべき「理想の自分」と現実の「嫌悪すべき自分」とが乖離し、「引き裂かれた自己」に苦悩するわたしたち現代人の姿と写し絵のように重なって見えるのです。なぜなら、わたしたちのこの社会もまた、「べきである」や「べきでない」という規範が跋扈してお

り、「べきの暴君」が「専制的・独裁的」にわたしたちを支配してしまっていると言えるからです。

「べきの暴君」からの解放

卒業生のみなさんが、これから様々な場で活躍していくとき、もし仮に「べきの暴君」に縛られ、強迫観念から何事かをなしていくことになってしまうとすれば、過酷なストレスに打ちめされてしまうかもしれません。それに加えて、この社会は理不尽さや不条理さに満ち溢れており、嫌でもしなくてはならないこともたくさん待ち構えています。

このように内的にも外的にも「べきの暴君」に四面楚歌の如く囲まれてしまうのであれば、いっそのこと「すべき」や「すべきでない」という規範に縛られたままで、マニュアル通りに生きた方が楽だという考えも成り立つかもしれません。

しかしながら、自分の心奥に「原罪」のように居座る「べきの暴君」に支配されて生きるのは、とても息苦しいものです。やはり、「こうすべき」とか「こうすべきではない」という「べきの暴君」の桎梏から自分自身を解放していく道を選んで欲しいと思います。そのためには、「こうしたい」とか「こういうふうになりたい」という自分の心奥の声に耳を傾け、自分の人生は自分自身が決めていくという自由を大切にしていって欲しいと希っています。

賀川豊彦と酪農讃歌

獣医学類 獣医衛生学ユニット 永幡 肇



(賀川豊彦)

賀川豊彦は、日本の戦前から戦後にかけて、社会的弱者、孤児、貧困や病で見捨てられた日陰で生きる人々とともに、平和一等国の建設を夢に活動した社会運動家であった。

その活動は労働運動、農民運動はじめ日本で最初に生協組織を創設し組合運動を提唱したのも賀川であった。

救貧から防貧

賀川は多くの時間を農民教育に注いできたとして述べている。なぜ農民教育に心血を注いだのか。スラムでは農村の出身者の身売りや、ホームレスの暮らしぶりをみても、「この人たちを仮に救済することが出来たとしても、それは一時的な問題で、また新しい人がここに流れ着いてくるに違いない。大事なことはここに住むような人を作らないことが大切である。その為には農村をよくしてこんな所へ来なくてもよいようにすること」つまり「農民そのものの教育が急務であり、農民の自覚こそが問題を解決する」と述べている。農民教育の重要性を認識し、そのベクトルは“救貧から防貧”へと向いていたのである。

デンマークの国民学校

賀川は昭和初期に北欧を訪れ強い影響を受け、農村の改善に情熱と大いなる夢を抱いていたことがうかがえる。

「農村を改良するには、やはり、グランドビイ流にやらなくてはいけないと思います。つまり、私の言うのは、土から生えねばならぬということです。農村ほど精神的社会組織の必要を感じるところはありません。デンマーク流に農村における精神改造から始めなければならないのではないかと思います。日本に帰って、デンマークをお手本にしようと思います」とある(横山 1953)。また「賀川はデンマークの国民学校を開いてみたいと思ったけれども、資金や教師の点で難しいと感じていたようであった。ところが、デンマークを去る日、国民学校の人々から、デンマーク式に農民学校を日本に作るようにと寄付が託されたのである。この日から、賀川の心の中では農民福音学校の構想が強く描かれはじめた」と記されている。

日本農民福音学校

賀川は農村の改造に使命を感じ、神戸での労働組合運動が一段落したあと農民福音学校を開校したのである(1927(昭和2)年、賀川38歳)。建物は賀川の自宅(兵庫県瓦木村)が開放され塾生と起居をともにしたのであった。学びの範囲は、社会学、哲学、文学、宗教

学、農業について、賀川自らが講義するとともに京都帝大教授、試験場長や篤農家などの協力を得て行われたのである。酪農学園の酪農義塾が開校されたのが1933(昭和8)年であるから、すでに賀川はキリスト教精神に基づいた実践的な農民学校を始動していたことになる。

関東大震災に伴い賀川の活動拠点を関東(武蔵野)へ移すとともに武蔵野農民福音学校、ついで御殿場に、そして横山春一により始められた北海道江部乙の芽生村塾に北海道農民福音学校が設立され4校になった、とある。芽生村塾で開校された農民福音学校の講師には、宇都宮仙太郎はじめデンマーク生活の経験者、出納陽一はじめ、後に酪農学園の教育に関わった教員、試験場長および篤農家の名前がみられる。当時の農民福音学校の募集案内には、農家の後継者である長男を対象とし1~2月の農閑期に1か月ぐらいの期間、米と布団持参とある。賀川は江部乙にあった農民福音学校を3~4回訪れている。やがて農民福音学校は全国的な規模で広がり数十か所で開催されていった。

酪農讃歌

賀川はデンマークのグルンドビィの精神にふれフォルケスコレ(国民学校)の学びから「土を愛し、隣人を愛し、神を愛する」を掲げていたのである。学園の創設者である黒澤西藏も、三愛精神を掲げ義塾を開塾しているが、賀川と黒澤との親交はどうであったのか。学園史には、賀川は1948(昭和23)年、野幌機農高等学校に特別講師として招かれ、「日本救国論」と題して講演を

したことが記されている。酪農学園の揺籃期の方向性と賀川の農民福音学校の設立とその実践的展開において、多くの共通点を見出すことができる。酪農讃歌はこの頃作詞が依頼されたのであろうか。歌詞は賀川豊彦が作り、長男の純基(すみもと)氏(短期大学50周年大学40周年記念に来学)が作曲するよう父から頼まれたのである。「黒土よ.. 地上を飾る日のもとに」と歌っているが、賀川豊彦が作詞した原詞には「地上を飾る 野幌に」となっていたのである。純基氏によると、父豊彦は大変に気に入ったようで、「野幌を日のもとに」として各地で歌っていたとのことである。「黒土よ.. 倒るる時も見捨てずに.. 窮乏の底に沈める国おこせ..」この歌詞は、賀川が命をかけて願ってきた、まさに「心からの願い」であったのであろう。

慈しみ

賀川は農民福音学校にとどまらず、日本全国を病の身で福音伝道に心血を注ぎ、さらには英国、ドイツ、北欧、カナダ、米国、ブラジルにおいて大観衆を前にした講演風景が多く残されている。戦後処理においては日本人で最も信頼でき話のできる人間は賀川であったと記されている。ノーベル文学賞、平和賞候補にも挙げられた。一生涯を通じて、社会活動、農村改善、福音伝道と歩み続けた人生であったが、いうまでもなく弱者の救済と扶助、福音、協同、人類愛の精神が根底にあり、その生き方は酪農讃歌の歌詞に象徴されているように思う。酪農学園で学んだひとりひとりに託された務めと使命には大きいものがあろう。

「未見へのまぼろしと真理の探求」



環境共生学類 生命環境物理学研究室 矢吹 哲夫

ご卒業おめでとうございます。人生の中のどの一日も一度しかない、かけがえのない一日ですが、その中でも一つのゴール、一つのスタートという特別な一日があります。皆さんにとっては、まさに今日が一つのゴールであり、同時に新たなスタートを踏み出す特別な一日です。これまでの酪農学園大学での数年間が、皆さんにとって未来へ踏み出すための第一歩だったとすれば、今日は明日からの未だ見ぬ日々であり未だ見ぬ世界への船出といえます。実は、皆さんのこれからの人生だけではなく、我々人間社会全体にとっても未だ見ぬ“未踏の大地”が、これからの皆さんの眼前に広がっているのです。

以下、今日酪農学園大学の学び舎を巣立って社会に飛び立って行く皆さんに、改めて本学の初代学長樋浦誠先生がその著書『農村青年と科学』（1948年出版：写真）の巻頭言の『大いなる理想』で語られた言葉を紹介したいと思います。樋浦先生は「理想は人間の特殊性である。」と書かれた後「理想とは何であるか。未見への夢である。未見へのまぼろしである。」と書かれ

ています。ここで樋浦先生が書かれた『未見』というのは、文字通り「未だ見ぬもの」すべてのことを意味します。これは、ただ教科書を読み、先人が言っていること、あるいは同時代の専門家が言っていることを既に見たこととして学ぶだけではなく、未だ見ぬことが山のようにある未踏の大地を常に新鮮な気持ちで歩いて行くことこそ、これから世に出る大学生達にとって最も大事なことというメッセージが凝縮された言葉であると私は考えています。荒れ地を開拓するパイオニアのように、世に出る若者一人一人が好奇心、探究心のエネルギーを絶やすことなく、初めて経験する課題に臆せず立ち向かって、夢（まぼろし）の木の实をもぎ取ってほしいと願っておられたことと思っています。

さらに『農村青年と科学』の本論の中で、「科学の実体は、科学者の到達した結論よりも、むしろ結論に到達するまでの過程の中に把握されるべきものである。」と書かれています。このメッセージの中に、結果を覚えるだけではなく、その結果が生じるプロセスとメカニズムを理解することの大切さこそ実社会に出る前の大学で学ぶべき



農村青年と科学の表紙

ことであることが簡潔に示されています。またこの後で、「どの時代の科学知識といえども、次の時代の科学知識によって訂正されないとは決して断言しがたいものである。この意味で、およそ科学知識なるものは、過去の科学知識も、現在の科学知識も、また未来の科学知識も、いずれもすべて仮説と称せられるべき性格を帯びている。」とも書かれています。このことから、巻頭言で書かれた『未見へのまぼろし』は、完全には未だ見ぬ「真理」への探求を指していることが理解されます。

皆さんは今日まで酪農学園大学での学びの時をもつ中で、この樋浦先生のメッセージを様々な場面で体得されてきたことと思います。是非、これから

酪農学園大学を巣立って行く皆さんは、初代学長樋浦先生が言われたように、未だ見ぬことが山のようにある“未踏の大地”を常に新鮮な気持ちで歩んで行ってほしいと願っています。

その為に、最後に新約聖書から以下の有名な山上の垂訓（イエスの言葉）を引用しておきたいと思います。

「心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである。」

この垂訓で、「心（自分の思い）が貧しいもの（少ないもの）は、その分自分を越える存在である神の御心に従う従順さをもっているのだから、幸いであり天の国への道も開かれている。」ということを示されたものと私は理解してきました。この「心の貧しい」という言葉の中に、心（自分の思い）が樋浦初代学長の言われた「未見へのまぼろし」（自分の未だ見ていない世界）への扉を閉ざしてしまうことになるという意味も見出すことが出来るのではないのでしょうか。

私も23年間務めた酪農学園大学を皆さんと一緒に巣立って行きますが、これからも酪農学園大学で培った「未見へのまぼろしと真理の探求」を続けていきたいと思っています。その私から、明日から新たな「未見へのまぼろしと真理の探求」を始めようとしている皆さんに、樋浦誠初代学長が残された私の大好きな次の言葉を“はなむけの言葉”として贈ります。

『偶然は、発見の良き友である。』

多くの出会いとヒンメリ



食と健康学類 栄養指導論研究室 杉村留美子

クリスマスのアドベントを迎える時期に、黒澤記念講堂のエントランスホールにはヒンメリが飾られておりました。材料となるライ麦は酪農学園大学の畑で収穫されたものであり、義平大樹先生（作物学研究室）からのご提供でした。制作は宮崎早花先生（食物利用学研究室）による農産物利用学実習での作品です。

ヒンメリは正八面体を組み合わせて作られたユニットを、いくつもつなぎ合わせて幾何学的なモビールへと完成します。麦わらに糸を通して形作る様々な大きさとその影がなんと美しい光景でありました。クリスマスの装飾の他、翌年の豊穡や家族の健康への願いを込めていたそうです。

卒業生の皆さんは、これまでの学生生活の中で多くの出会いがあったと思います。それぞれの出会いに学びや経

験、思い出があったはずですが。それはまるでヒンメリを構成するユニットのようですね。一つひとつの出会いを繋ぎ合わせて今の自分自身があり、この日卒業を迎えました。ここからまた出会いの新たなユニットを築き、飛躍していくことでしょう。

新しい門出をお祝い申し上げます。



あ と が き

- ◇酪農学園大学卒業生としての『誇り』を忘れないで下さい。(T.M.)
- ◇これまでの仲間との出会いをどうぞ大切に。(R.S.)
- ◇『出会い』77号(卒業式号)をお届けします。今回は定年退職でみなさんと一緒に《卒業》する永幡肇先生と矢吹哲夫先生のおふたりにも原稿を

- ◇お寄せいただくことができました。
- ◇3頁のC1号館の壁に描かれているローマ書の言葉は、日本語の聖書では「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」というものです。みなさんの人生が希望に繋がっているということを忘れずに、新たな一歩を踏み出してください。(A.K.)

酪農学園大学キリスト教教育委員会
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地
Tel. 011-386-1111 (代表)



酪農学園大学 2014
JHEE
UNIVERSITY
2014



(酪農学園大学公式サイト)